

平成17年1月27日
国土交通省河川局

平成15年度「河川水辺の国勢調査」結果の概要について

国土交通省では、河川環境の整備と保全を適切に推進するため、河川における生物相を定期的、継続的、統一的に把握することを目的として、河川、ダムにおける生物調査等を行う「河川水辺の国勢調査」を平成2年度より実施しています。

14年目となる今回は、平成15年度に実施した一級水系105水系(123河川)、二級水系14水系(14河川)と、管理中の94ダムにおける生物調査の結果がまとまりましたので概要を発表いたします。

なお、詳細な調査結果「平成15年度河川水辺の国勢調査結果の概要」については、当省のHPに掲載するとともに、今年度中に水情報国土ホームページ(<http://www.mlit.go.jp/river/IDC/index.html>)にて公開する予定です。

【問合せ先】

国土交通省河川局河川環境課

Tel. 03-5253-8111 (代表)

03-5253-8447 (直通)

課長補佐 藤巻 浩之 (内 35442)

係長 横濱 秀明 (内 35443)

1. 調査実施状況

全国の一級水系 105 水系（123 河川）、二級水系 14 水系（14 河川）及び管理中の 94 ダム（遊水地、調節池を含む）において生物調査を実施

河川水辺の国勢調査では、全国の一級水系及び主な二級水系の河川及び国土交通省、水資源機構管理のダムを対象に、「魚介類」、「底生動物」、「植物」、「鳥類」、「両生類・爬虫類・哺乳類」、「陸上昆虫類」、「動植物プランクトン（ダム湖のみ）」の各項目の生物調査を概ね 5 年間で 1 巡するように実施しており、平成 15 年度調査は、第 3 巡目の 3 年目にあたります。

今回発表する資料は、平成 15 年度に実施した一級水系 105 水系（123 河川）及び二級水系 14 水系（14 河川）並びに管理中の 94 ダムにおける生物調査結果を取りまとめたものです。

今回とりまとめを行った調査項目ごとの河川及びダム数は下表のとおりです。

表 平成 15 年度調査河川及びダム

項目		魚介類	底生動物	植物	鳥類	両生類 爬虫類 哺乳類	陸上 昆虫 類等	動植物 プラン クトン	合計
河川	一級水系数	24	24	6	28	26	25		105
	（河川数）	(29)	(25)	(6)	(31)	(31)	(27)		123
	二級水系数	14	-	-	-	-	-		14
	（河川数）	(14)	(-)	(-)	(-)	(-)	(-)		14
	合計	38	24	6	28	26	25		119
	（河川数）	(43)	(25)	(6)	(31)	(31)	(27)		137
ダム	ダム数	18	17	20	29	22	29	9	94

複数の項目について調査を実施した河川（水系）、ダムがあるため、各項目ごとの河川（水系）数、ダム数の和は合計と一致しません。

2. 生物の確認種数の状況

河川とダムで「日本野生生物目録」等掲載種の約7割の魚類、約5割の鳥類を確認

平成15年度の調査において確認された種数は下表のとおりです。

河川とダムで、「日本野生生物目録」等掲載種のうち、淡水魚・汽水魚で71%、鳥類で52%、両生類で46%の種がそれぞれ確認されています。河川、ダムという限られた空間が多様な生物の生息・生育の場となっていることが分かります。

表 平成15年度調査における確認種数

	調査項目	確認種数	「日本産野生生物目録」等掲載種数	確認率 /
河川・ダム	魚類（淡水魚・汽水魚）	142(282)	200	71%
	エビ・カニ・貝類	177	-	-
	底生動物	1,075	-	-
	植物	2,730	8,118	34%
	鳥類	298	568	52%
	両生類	27	59	46%
	爬虫類	16	87	18%
	哺乳類	73	188	39%
	陸上昆虫類等	9,487	33,220	29%
	植物プランクトン	398	-	-
	動物プランクトン	144	-	-

注)・植物と鳥類を除く各調査項目は、環境庁「日本野生生物目録」の種数を掲載しています。

- ・植物は、環境庁「植物目録1987」の維管束植物の種数を掲載しています。
- ・鳥類は、「日本産鳥類目録改訂第6版」の種数を掲載しています。
- ・魚類の「日本野生生物目録」の200種は淡水魚、汽水魚が対象。確認種数には「日本野生生物目録」に掲載されている淡水魚・汽水魚数を示し、括弧内には海水魚を含む全確認種数を示します。
- ・底生動物と動物プランクトンは、掲載されていない分類群があるため、種数の比較は行っていません。

3. 外来種の確認状況

多くの外来種が河川とダムに定着し、その生息域が拡大

外来種は、人間によって意図的・非意図的に、本来の生息域とは違うところに持ち込まれた種で、生物多様性を保全する上で最も大きな脅威の一つになると考えられています。

下表に、河川とダムを合わせた外来種の確認種数と主な外来種¹の確認河川・ダム数の割合の推移を示しました。繁殖力が強いいため、在来の魚類への影響が問題になっている雑食性のブルーギルと魚食性の強いオオクチバスをはじめとして、イネの害虫として知られるイネミズゾウムシなど多くの外来種が定着、あるいは生息域を拡大している傾向がみられます。

外来種は、競争、捕食、病害あるいは環境の改変を通じ、在来種の存続を脅かす大きな要因となることが知られています。そのため、今後も河川水辺の国勢調査により、モニタリングを続けていくことが必要です。

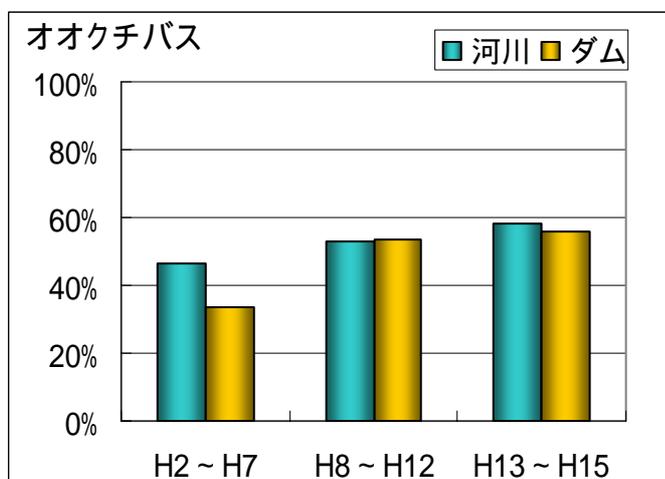
表 平成 15 年度調査における外来種の確認種数

	調査項目	外来種確認種数	現地確認種総数	外来種確認率 /
河川・ダム	魚類	16	282	6%
	エビ・カニ・貝類	14	177	8%
	底生動物	21	1,075	2%
	植物	294	2,730	11%
	鳥類	14	298	5%
	両生類	1	27	4%
	爬虫類	1	16	6%
	哺乳類	8	73	11%
	陸上昆虫類等	106	9,487	1%

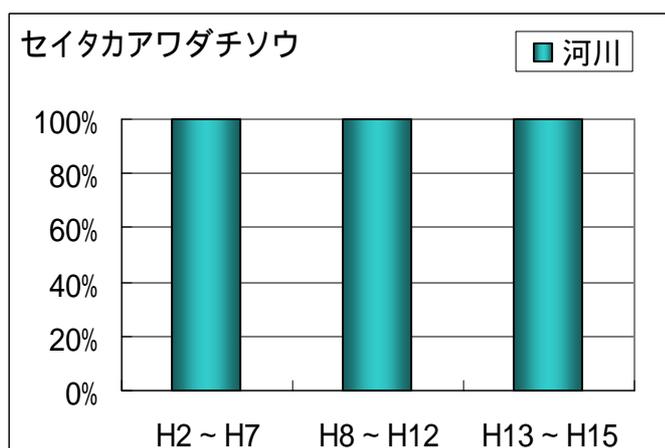
1:日本の侵略的外来種ワースト100に掲載されている種

外来種の確認河川・ダム数の割合の推移

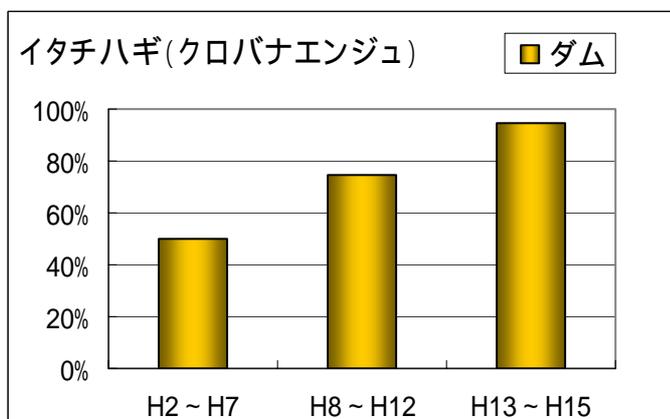
平成15年度調査を実施した河川・ダムについて、主な外来種の確認河川・ダム数の割合の推移は以下の通りです。



在来種への影響が懸念されているオオクチバスは、従前からその生息が確認されており、今回調査を実施した河川・ダムのうち約半数において生息している傾向が確認できます。



セイタカアワダチソウは、今回調査を実施した全ての河川で従前から確認されており、以前から定着している傾向が確認できます。



イタチハギ(クロバナエンジュ)は、調査年度が進むにつれて生息域を拡大している傾向が確認されます。現在では、今回調査を実施したダムのほとんどに生育しています。

確認河川・ダム数の割合 = 外来種確認河川・ダム数 / 調査河川ダム数

表 主な外来種の確認河川数の割合

調査項目	種和名	各調査年度における確認河川数の割合 (%)		
		H2～H7	H8～H12	H13～H15
魚類	ブルーギル	32.1%	47.2%	46.5%
	オオクチバス	46.4%	52.8%	58.1%
	コクチバス	0%	0%	4.7%
底生動物	スクミリンゴガイ (ジャンボタニシ)	11.8%	22.5%	19.1%
	コウロエンカワヒバリガイ	5.9%	12.5%	14.9%
	アメリカザリガニ	50.0%	67.5%	68.1%
植物	イタチハギ (クロバナエンジュ)	16.7%	83.3%	83.3%
	ハリエンジュ (ニセアカシア)	50.0%	50.0%	50.0%
	オオアレチノギク	100%	83.3%	100%
	セイタカアワダチソウ	100%	100%	100%
	オオオナモミ	50.0%	83.3%	83.3%
	オニウシノケグサ	66.7%	50.0%	83.3%
両生類	ウシガエル	74.2%	64.5%	74.2%
爬虫類	ミシシippアカミミガメ	32.3%	48.4%	64.5%
哺乳類	ヌートリア	16.1%	25.8%	22.6%
陸上昆虫類等	イネミズゾウムシ	44.4%	66.7%	55.6%

平成 15 年度調査実施河川を対象としています。

表 主な外来種の確認ダム数の割合

調査項目	種和名	各調査年度における確認河川数の割合 (%)		
		H2～H7	H8～H12	H13～H15
魚類	ブルーギル	41.7%	46.2%	55.6%
	オオクチバス	33.3%	53.8%	55.6%
	コクチバス	0.0%	0.0%	5.6%
底生動物	サカマキガイ	23.1%	72.7%	47.1%
植物	イタチハギ (クロバナエンジュ)	50.0%	75.0%	95.0%
	ハリエンジュ (ニセアカシア)	81.3%	81.3%	80.0%
	アレチウリ	18.8%	37.5%	40.0%
	オオブタクサ	12.5%	31.3%	30.0%
	セイタカアワダチソウ	56.3%	62.5%	75.0%
	オオオナモミ	25.0%	50.0%	70.0%
	カモガヤ	93.8%	87.5%	95.0%
	オニウシノケグサ	56.3%	75.0%	90.0%
	シナダレスズメガヤ	25.0%	31.3%	45.0%
両生類	ウシガエル	37.5%	37.5%	40.9%
爬虫類	ミシシippアカミミガメ	25.0%	25.0%	18.2%
陸上昆虫類	イネミズゾウムシ	17.4%	8.7%	31.0%

平成 15 年度調査実施ダムを対象としています。

【コクチバスの分布状況】

ななき たがわ 七北田川、 荒川、 みやがせ 宮ヶ瀬ダムにおいて新たに確認

コクチバスは、1990年代に持ち込まれ、放流によって各地に分布域を拡大している種です。オオクチバスよりも低水温、流水環境を好むため、河川に生息する在来種への影響が懸念されています。今回の調査では、東日本の七北田川、荒川で新規に確認されました。七北田川では繁殖も確認されています(河北新報, 2004年10月27日)。ダム湖では、同じく東日本の宮ヶ瀬ダムで確認されました。平成13年度に矢木沢ダムにおいて確認されて以来、水辺の国勢調査のダムにおける2例目の確認となります。

今後東日本において分布を拡大することも懸念されるため、河川水辺の国勢調査によりモニタリングを続けていく必要があります。

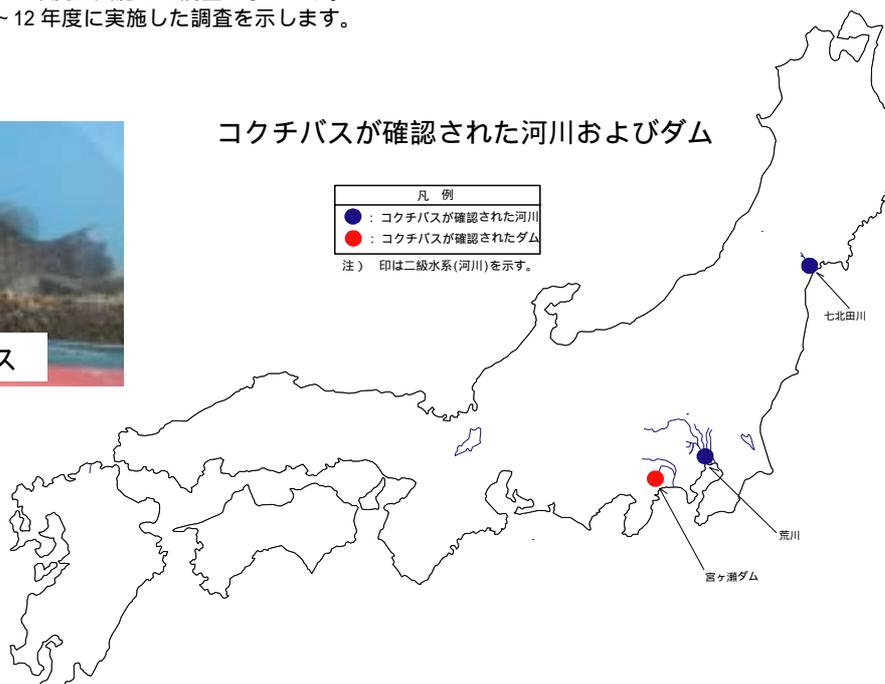
確認河川数¹・ダム数²の比較

種類	前々回調査 ³	前回調査 ⁴	今回調査
コクチバス	0河川	0河川	2河川
	0ダム	0ダム	1ダム

- 1:平成15年度に調査を実施した河川のうち、平成2~7年度の間に調査を実施している28河川における確認状況を示します。
- 2:平成15年度に調査を実施したダムのうち、平成2~7年度の間に調査を実施している13ダム及び平成13~15年度の間に調査を実施した5ダムにおける確認状況を示しています。
- 3:おおそ平成2~7年度に実施した調査を示します。
- 4:おおそ平成8~12年度に実施した調査を示します。



コクチバスが確認された河川およびダム



4. 特定種等の確認状況

沖縄のダムで国の特別天然記念物であるノグチゲラを確認。

ノグチゲラは国の特別天然記念物のほか、環境省のレッドデータブックで絶滅危惧ⅠA類(ごく近い将来における絶滅の危険性が極めて高い種)に指定されている中型のキツツキです。沖縄島北部の照葉樹林にのみ生息し、大木の幹に自分で穴を掘り、巣をつくります。枯木や倒木、地上で昆虫類などを食べ、夏～秋にはアカメガシワ、ヒメイタビ、ハゼなどの果実を食べます。



ノグチゲラ

沖縄振興策の一環として、この地域の森林伐採、農地開発およびダム建設が実施され、生息地である天然林が減少し、分断化されてしまいました。現在は米軍北部訓練基地を中心とする地域に200つがいに満たない個体が生息していると考えられています。また、現在は従来の捕食者であるハシブトガラスのほか、外来種であるネコ、マングースが生息域に進入しており、影響が懸念されています。

今回調査が行われた沖縄のダムのうち、安波ダム、普久川ダム、新川ダム、福地ダム、辺野喜ダムでノグチゲラが確認されました。

【天然記念物オジロワシの確認状況】

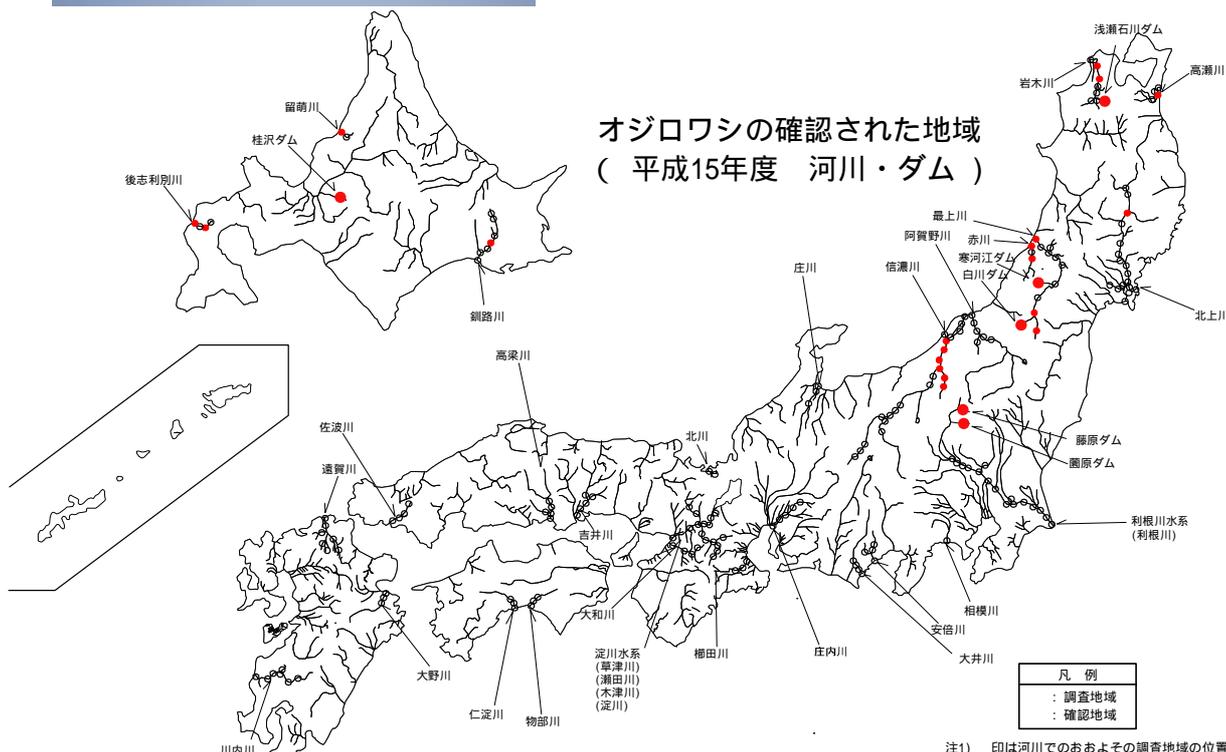
水辺の食物連鎖の上位種であり、また国の天然記念物でもあるオジロワシを、今回とりまとめを行った北海道、東北地方、北陸地方の一級河川・ダムのごとんどで確認。良好な水辺環境が保全されていることを示唆。

オジロワシは、魚や水鳥を主な餌とする大型の猛禽類で、北海道で繁殖し、海岸や湖沼周辺、河川流域の大木に営巣します。冬季には越冬のため本州北部や中部にも飛来します。最近は、人間の活動圏近くで営巣するつがいが増え営巣地はやや増加傾向にありますが、反面、人為的影響も大きく繁殖は必ずしも安定していません。オジロワシは、国の天然記念物(文化財保護法)および国内希少野生動物種(種の保存法)に指定されており、また、環境省レッドデータブック(2002)により絶滅危惧B類に指定されています。



オジロワシ

オジロワシは、今回とりまとめを行った河川・ダムのうち、主な生息域である北海道、東北地方、北陸地方のごとんどで確認され、良好な水辺環境が保全されていることが示唆されました。



オジロワシの確認された地域
(平成15年度 河川・ダム)

凡例	
○	調査地域
●	確認地域

- 注1) 印は河川でのおおよその調査地域の位置を示す。
 注2) 図中の確認地域は「集団分布調査」と「移動時調査」を含まないため、これらの調査でのみ確認された場合は図示されない。
 注3) 阿賀野川では調査地区以外での確認だったため図示していない。

5. その他のトピックス

【分布を拡大するチョウ類の確認状況（地球温暖化）】

ナガサキアゲハを中部地方の天竜川と矢作川で初めて確認。地球温暖化の影響による分布拡大の可能性を示唆。

ここでは、近年の地球温暖化に伴い分布域を拡大していると考えられている昆虫類のなかでも、大型で目に付きやすく、追跡確認の比較的容易な暖地性のチョウであるナガサキアゲハを取り上げ、その分布動向を整理しました。

河川水辺の国勢調査によって、ナガサキアゲハが中部地方から確認されたのは今回が初めてで、天竜川と矢作川の2河川で記録され、調査結果からは、ナガサキアゲハが分布を拡大する傾向が認められました。文献による国内の記録では、本種は1920年代までは四国南部、九州以南に分布していたものが、1980年代初頭には近畿地方、1997年には静岡県浜松市まで生息域が拡大し、2000年までに神奈川県、埼玉県内でも目撃されるなど、この20年あまりで急速に北上を始めたことがうかがい知れます。なお、近年の研究では、本種の北上の経過と各地の気温の相関関係を分析し、年間の平均気温が15度程度に上昇すると、ナガサキアゲハの分布がみられるようになると報告されています。（山梨県環境科学研究所, 2001）

確認河川数の比較（対象河川：27河川）

種類	前々回調査 ¹	前回調査 ²	今回調査
ナガサキアゲハ	9河川	5河川	12河川

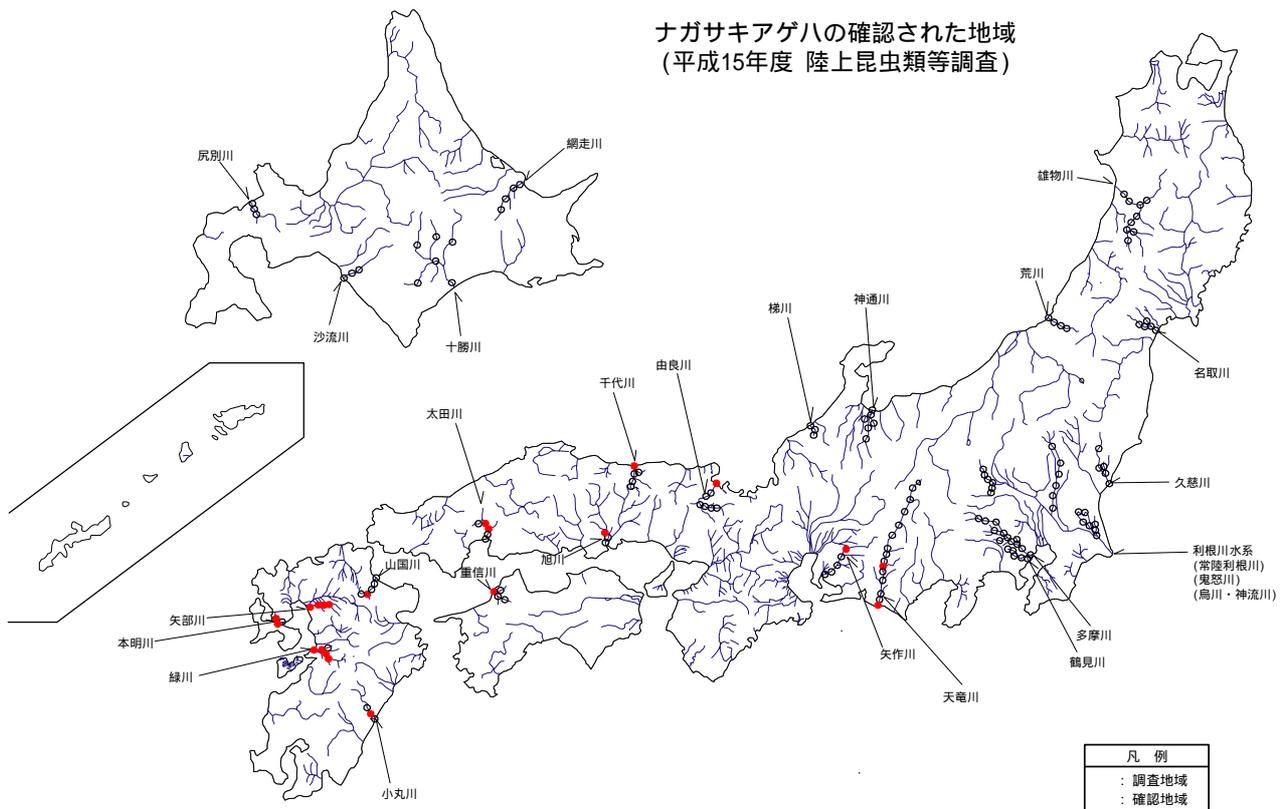
1：平成4年～7年、 2：平成8年～12年

ナガサキアゲハ

ナガサキアゲハは、開(翅)長約94～113mmの大型のアゲハチョウで、幼虫は栽培ミカン類各種を好んで食草とし、ときにカラタチやヒラミレモンを食すこともあります。成虫は食草の関係もあって人家周辺に多く生息し、ツツジ類やユリ類、ネムノキなどの花で吸蜜します。九州以北では通常蛹越冬で、蛹は食草の枝、付近の塀や軒下などで見られます。近年、国内では分布域の北進拡大が最も顕著な昆虫類のひとつといえます。



ナガサキアゲハ(,沖縄本島産)



注) 印はおおよその調査地域の位置を示す。

平成15年度「河川水辺の国勢調査」結果を公表

北陸版記者発表資料

概要

国土交通省では、全国の1級水系、主要な2級水系及び1級水系の直轄ダム湖について、事業の実施や維持管理を適切に推進するため、河川・ダム湖を環境という観点からとらえた系統的な河川・ダム湖に関する基礎情報の収集整備を図ることとし、河川・ダム湖に生息する生物の調査、河川空間・ダム湖の利用実態の調査等を行う「河川水辺の国勢調査」を平成2年度から実施しています。

今回は、平成15年度に実施した北陸地方整備局管内の1級水系12水系15河川と直轄管理5ダムの「生物調査結果」を発表するものです。

河川水辺の国勢調査の結果については、水情報国土ホームページにて詳細な調査結果を今年度中に公開する予定です。

水情報国土ホームページ(<http://www.mlit.go.jp/river/IDC/index.html>)

公表資料

- ・平成15年度【北陸管内】調査項目別実施水系・ダム数一覧表
- ・平成15年度生物調査(河川編)結果の概要
- ・平成15年度生物調査(河川編)特定種一覧表
- ・平成15年度生物調査(河川編)外来種一覧表
- ・平成15年度生物調査(ダム湖編)結果の概要

問い合わせ先

国土交通省 北陸地方整備局 025 - 266 - 1171(代表)

〈河川編に関する問い合わせ先〉

河川計画課 課長 守安 邦弘 (内線3611)
建設専門官 石川 俊之 (内線3618)

〈ダム湖編に関する問い合わせ先〉

河川管理課 課長 矢田 弘 (内線3751)
課長補佐 酒井 大助 (内線3753)

平成15年度生物調査(河川編)結果概要

1. 魚介類調査

【対象水系:姫川水系、黒部川水系 前回調査平成10年度】

姫川水系では魚類19種、エビ・カニ・貝類4種の合計23種(前回調査33種)、黒部川水系では魚類28種、エビ・カニ・貝類11種の合計39種(前回調査33種)を確認しました。

黒部川水系で2種の外来種を確認
姫川水系では、外来種は確認されませんでした
黒部川水系で3種の特定種を確認
姫川水系では、特定種は確認されませんでした

近年、在来の魚類群集への影響が懸念されているブルーギル、オオクチバス(ブラックバス)とコクチバスの外来種(3種)を取り上げ、確認状況を整理しました。

ブルーギルは、今回とりまとめを行った全国43河川のうち、20河川と約半数の河川で確認され、確認河川数の増加がみられました。オオクチバスは、今回とりまとめを行った全国43河川のうち、25河川で確認されました。両種の確認地域をみると、東北地方から九州地方までの広い範囲で確認されましたが、北陸地方の姫川・黒部川及び北海道地方では確認されませんでした。ただし、これらの外来種は分布域を拡大することが予想されますので、今後もモニタリングを継続していく必要があると考えられます

特定種とは、絶滅のおそれのある野生動植物の種のことで、別紙特定種一覧表で各調査毎の一覧表と選定基準を記載しています。

2. 底生動物調査

【対象水系:姫川水系、黒部川水系 前回調査平成10年度】

姫川水系では163種(前回調査146種)、黒部川水系では112種(前回調査81種)を確認しました。

黒部川水系で1種、姫川水系でも1種の外来種を確認
黒部川水系で1種の特定種を確認
姫川水系では、特定種は確認されませんでした

カゲロウ目、カワゲラ目、トビケラ目は、渓流など砂礫底の河川を代表する水生昆虫類です。これらの多くは水質汚濁に対して弱いことから、カゲロウ目(E)、カワゲラ目(P)、トビケラ目(T)の合計種数を全確認種数で除した値EPT指数を、水質の健全度を表す指標として用いることがあります。今回とりまとめを行った全国26河川の調査地区をそれぞれ河川の上流、中流、下流、河口に分け、河川別、流程別のEPT指数を整理しました。流程別でみると、全体的に上・中流でEPT指数が高く、流程が下るに従って低くなる傾向が見られました。

河川別では、北海道の常呂川、渚滑川、北陸地方の姫川、黒部川、中国地方の高津川の上流や中流などで高い値がみられました。

(特に冬から春にかけての調査) などの調査状況にも大きく影響されるため、種数が少ないことがそのまま水質の悪いことを示すものではありません。

3. 植物調査

[対象水系:常願寺川水系 前回調査平成10年度]

常願寺川水系413種(前回調査401種)を確認しました。

**全国的に外来種の分布範囲が拡大傾向
外来種67種、特定種3種を確認**

生態系や人間活動への影響が特に大きく、全国の河川において確認率の高い種について、確認状況を整理しました。

今回の調査では、イタチハギ(クロバナエンジュ)、オオアレチノギク、セイタカアワダチソウ、ヒメジョオン、キシヨウブ、オニウシノケグサ、カモガヤが常願寺川で前々回調査から引き続き確認されました。また、オオオナモミについても前回調査から継続的に確認されました。これらの種については既に定着状況にあることがうかがわれます。

今後の動向について特に注意を払う必要があります。

4. 鳥類調査

[対象水系:阿賀野川水系 前回調査平成9年度]

阿賀野川水系は阿賀野川のみを確認種数。(阿賀川については、来年度、公表します)

[対象水系:信濃川水系、庄川水系 前回調査平成10年度]

阿賀野川水系では110種(前回調査117種)、信濃川水系では138種(前回調査133種)庄川水系では97種(前回調査99種)を確認しました。

**絶滅危惧1B類オジロワシを阿賀野川、信濃川水系で確認
阿賀野川水系1種、信濃川水系2種、庄川水系1種の外来種を確認
阿賀野川水系11種、信濃川水系15種、庄川水系7種の特定種を確認**

オジロワシは、魚や水鳥を主な餌とする大型の猛禽類で、北海道で繁殖し、海岸や湖沼周辺、河川流域の大木に営巣します。冬季には越冬のため本州北部や中部にも飛来します。最近は、人間の活動圏近くで営巣するつがいが増え営巣地はやや増加傾向にありますが、反面、人為的影響も大きく繁殖は必ずしも安定していません。オジロワシは、国の天然記念物(文化財保護法)および国内希少野生動物種(種の保存法)に指定されており、また、環境省レッドデータブック(2002)により絶滅危惧 B類に指定されています。

今回、全国11河川で調査した結果、北陸地方を含む10河川で確認され、良好な自然環境が保全されていることが示唆されております。

5. 両生類・爬虫類・哺乳類調査

【対象水系：関川水系、小矢部川水系、手取川水系 前回調査平成10年度】

両生類については、関川水系3種(前回調査3種)、小矢部川水系4種(前回調査4種)、手取川水系で11種(前回調査12種)確認しました。

爬虫類については、関川水系4種(前回調査4種)、小矢部川水系6種(前回調査6種)、手取川水系で9種(前回調査10種)確認しました。

哺乳類については、関川水系11種(前回調査10種)、小矢部川水系10種(前回調査6種)、手取川水系で14種(前回調査15種)確認しました。

全国的に増加の傾向がみられる外来種のみシシピアカミガメは、関川水系では確認されず

外来種の確認種数

- ・両生類は、関川・小矢部川・手取川水系それぞれ1種を確認
- ・爬虫類は、小矢部川・手取川水系ともに1種を確認し、関川水系では確認されず
- ・哺乳類は、関川水系3種、小矢部川水系2種、手取川水系1種を確認

特定種の確認種数

- ・両生類は、確認なし
- ・爬虫類は、小矢部川水系のみ1種を確認
- ・哺乳類は、手取川水系のみ1種を確認

近年、本州、四国、九州のほかに、沖縄島や小笠原父島などでも生息が確認されている外来種のみシシピアカミガメは、前回から今回の調査結果をみると、確認された水系数が増加する傾向がみられるなか、小矢部川、手取川では前回に続き確認されましたが、関川では、確認されませんでした。

6. 陸上昆虫類等調査

【対象河川：荒川水系、神通川水系 前回調査平成10年度】

【対象河川：梯川水系 前回調査平成9年度】

荒川水系では1,613種(前回調査1,176種)、神通川水系では874種(前回調査918種)、梯川水系では694種(前回調査484種)を確認しました。

全国的に拡大分布している外来種のみシシピアカミガメを荒川・梯川水系で確認

荒川水系18種、神通川水系10種、梯川水系14種の外来種を確認

荒川水系3種、神通川水系1種、梯川水系2種の特定種を確認

シシピアカミガメは、もともと北米産の種ですが1996-97年に関東地方と関西地方で、ほぼ同時期に発見されて以来、急速に分布を拡大していることが知られています。今回の調査結果からも、シシピアカミガメやオオシシピアカミガメを食草にしている本種が急速に分布を拡大していることが確認されています。北陸においては、神通川では確認されませんでした。荒川・梯川は前回調査では確認されませんでした。今回確認されました。

表 平成15年度【北陸管内】調査項目別実施水系数一覧

調査項目	荒川水系	阿賀野川水系	信濃川水系	関川水系	姫川水系	黒部川水系	常願寺川水系	神通川水系	庄川水系	小矢部川水系	手取川水系	梯川水系
魚介類					■	■						
底生動物					■	■						
植物							■					
鳥類		■	■						■			
両生類・爬虫類・哺乳類				■						■	■	
陸上昆虫類	■							■				■

■ : 調査実施水系

表 平成15年度【北陸管内】調査項目別実施ダム数一覧

調査項目	大石ダム	手取川ダム	大町ダム	大川ダム	三國川ダム	宇奈月ダム
魚介類						■
底生動物						■
動植物プランクトン				■	■	■
植物	■					
鳥類		■	■	■		
両生類・爬虫類・哺乳類						
陸上昆虫類		■				

■ : 調査実施ダム

平成15年度生物調査(河川編)特定種一覧表(1)

【魚類】

目和名	科和名	種和名	天然記念物	種の保存法	RDB	北陸	
						姫川	黒部川
ヤツメウナギ目	ヤツメウナギ科	スナヤツメ			絶滅危惧II類		
コイ目	ドジョウ科	エゾホトケドジョウ			絶滅危惧II類		
水系別確認種数						0	2

RDB 環境庁(省)編(2003)「日本の絶滅のおそれのある野生生物のリスト」-「レッドデータブック」

【エビ・カニ・貝類】

目和名	科和名	種和名	天然記念物	種の保存法	RDB	北陸	
						姫川	黒部川
モノアラガイ目(基眼目)	モノアラガイ科	モノアラガイ			準絶滅危惧(NT)		
水系別確認種数						0	1

RL 環境庁編(2000)「日本の絶滅のおそれのある野生生物のリスト」-「レッドリスト」

【底生動物】

綱和名	目和名	科和名	種和名	天然記念物	種の保存法	RDB	北陸	
							姫川	黒部川
マキガイ綱(腹足綱)	モノアラガイ目(基眼目)	モノアラガイ科	モノアラガイ			準絶滅危惧		
水系別確認種数							0	1

RL 環境庁(省)編(2000)「日本の絶滅のおそれのある野生生物のリスト」-「レッドリスト」

【植物】

科和名	種和名	RDB	種の保存法	北陸
				常願寺川
タデ科	ノダイオウ	絶滅危惧II類		
ミズアオイ科	ミズアオイ	絶滅危惧II類		
ミクリ科	ミクリ	準絶滅危惧		
水系別確認種数				3

RDB 環境庁(省)編(2000)「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 - レッドデータブック」

【鳥類】

目和名	科和名	種和名	天然記念物	種の保存法	RDB	北陸		
						阿賀野川	信濃川	庄川
カイツブリ目	カイツブリ科	カンムリカイツブリ			地域個体群(Lp)			
コウノトリ目	サギ科	チュウサギ			準絶滅危惧(NT)			
カモ目	カモ科	マガン	天然記念物		準絶滅危惧(NT)			
		ヒシクイ	天然記念物		絶滅危惧2類(VU)			
		トモエガモ			絶滅危惧2類(VU)			
タカ目	タカ科	ミサゴ			準絶滅危惧(NT)			
		ハチクマ			準絶滅危惧(NT)			
		オジロワシ	天然記念物	国内希少野生動植物種	絶滅危惧1B類(EN)			
		オオワシ	天然記念物	国内希少野生動植物種	絶滅危惧2類(VU)			
		オオタカ		国内希少野生動植物種	絶滅危惧2類(VU)			
		ハイタカ			準絶滅危惧(NT)			
		チュウヒ			絶滅危惧2類(VU)			

平成15年度生物調査(河川編)特定種一覧表(2) 【鳥類】

目和名	科和名	種和名	天然記念物	種の保存法	RDB	北陸		
						阿賀野川	信濃川	庄川
タカ目	ハヤブサ科	ハヤブサ		国内希少野生動植物種	絶滅危惧1B類(EN) 絶滅危惧2類(VU) 情報不足(DD)			
チドリ目	シギ科	オオジシギ			準絶滅危惧(NT)			
	カモメ科	コアジサシ			絶滅危惧2類(VU)			
スズメ目	サンショウクイ科	サンショウクイ			絶滅危惧2類(VU)			
	モズ科	アカモズ			準絶滅危惧(NT)			
	ホオジロ科	ノジコ			準絶滅危惧(NT)			
水系別確認種数						11	15	7

RDB 環境庁編(2002)「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物」-「レッドデータブック」

注1)RDBにおける地域個体群について、は該当種を、は非該当種を示す。

注2)確認種は、「集団分布地調査」、「移動時確認調査」を含む。

注3)ハヤブサ(1種)については、4つの「亜種」に分類されている。

シベリアハヤブサ RDB指定なし シマハヤブサ 絶滅危惧1B類(EN)

ハヤブサ 絶滅危惧 類(VU) オオハヤブサ 情報不足(DD)

【両生類・爬虫類・哺乳類】

網和名	目和名	科和名	種和名	天然記念物	種の保存法	RDB	北陸		
							関川	小矢部川	手取川
爬虫綱	カメ目	スッポン科	スッポン			情報不足			
哺乳綱	ウシ目(偶蹄目)	ウシ科	カモシカ	特別天然記念物					
爬虫類水系別確認種数							0	1	0
哺乳類水系別確認種数							0	0	1

RDB 環境庁編(2000:両生類・爬虫類、2002:哺乳類)「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物」-「レッドデータブック」

【陸上昆虫類】

目和名	科和名	種和名	天然記念物	種の保存法	RDB	北陸		
						荒川	神通川	梯川
クモ目	カネコタテグモ科	カネコタテグモ			準絶滅危惧			
	ジグモ科	ワスレナグモ			準絶滅危惧			
	コモリグモ科	イソコモリグモ			絶滅危惧I類			
バッタ目(直翅目)	コオロギ科	オオオカメコオロギ			情報不足			
チョウ目(鱗翅目)	シジミチョウ科	ミヤマシジミ			絶滅危惧II類			
	アゲハチョウ科	ギフチョウ			絶滅危惧II類			
水系別確認種数						3	1	2

RL 環境庁編(2000)「無脊椎動物(昆虫類、貝類、クモ類、甲殻類等)のレッドリストの見直しについて」

【全項目】

凡例)文化財保護法

特天: 特別天然記念物、天: 天然記念物

種の保存法「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」

国内希少野生動植物種および緊急指定種

絶滅:我が国ではすでに絶滅したと考えられる種

絶滅危惧IA類:絶滅危惧IA類:ごく近い将来における絶滅の危険性が極めて高い種

絶滅危惧IB類:IA類ほどではないが、近い将来における絶滅の危険性が高い種

絶滅危惧II類:絶滅の危険が増大している種

準絶滅危惧:現時点では絶滅危険度は小さいが、生息条件の変化によっては「絶滅危惧」に移行する可能性のある種

情報不足:評価するだけの情報が不足している種

地域個体群:地域的に孤立しており、地域レベルでの絶滅のおそれが高い個体群

平成15年度生物調査(河川編)外来種一覧表(1)
【魚類】

目和名	科和名	種和名	北陸	
			姫川	黒部川
サケ目	サケ科	ニジマス		
水系別確認種数			0	1

【エビ・カニ・貝類】

目和名	科和名	種和名	北陸	
			姫川	黒部川
モノアラガイ目(基眼目)	サカマキガイ科	サカマキガイ		
水系別確認種数			0	1

【底生動物】

綱和名	目和名	科和名	種和名	北陸	
				姫川	黒部川
マキガイ綱(腹足綱)	モノアラガイ目(基眼目)	サカマキガイ科	サカマキガイ		
水系別確認種数				1	1

【植物】

科和名	種和名	北陸 常願寺川
タデ科	ヒメスイバ	
	エゾノギシギシ	
ヤマゴボウ科	ヨウシュヤマゴボウ	
ナデシコ科	オランダミミナグサ	
	ムシトリナデシコ	
	マンテマ	
	コハコベ	
アカザ科	ケアリタソウ	
アブラナ科	マメゲンバイナズナ	
	ゲンバイナズナ	
ベンケイソウ科	ツルマンネングサ	
マメ科	イタチハギ	
	ハリエンジュ	
	コメツツメクサ	
	ムラサキツメクサ	
	シロツメクサ	
トウダイグサ科	コニシキソウ	
ニガキ科	シンジュ	
アカバナ科	メマツヨイグサ	
	コマツヨイグサ	
モクセイ科	トウネズミモチ	
クマツヅラ科	ヤナギハナガサ	
シソ科	ハナトラノオ	
ゴマノハグサ科	アメリカアゼナ	
	オオカワヂシャ	
	タチイヌノフグリ	
	オオイヌノフグリ	
オオバコ科	ヘラオオバコ	
キキョウ科	キキョウソウ	
キク科	セイヨウノコギリソウ	
	フタクサ	
	ヒロハホウキギク	
	ホウキギク	
	アメリカセンダングサ	
	オオアレチノギク	
	コスモス	
	アメリカタカサブロウ	
	ダントボロギク	

平成15年度生物調査(河川編)外来種一覧表(2)

【植物】

科和名	種和名	北陸
		常願寺川
キク科	ヒメムカシヨモギ	
	ハルジオン	
	チチコグサモドキ	
	ノボロギク	
	セイタカアワダチソウ	
	オニノゲシ	
	ヒメジョオン	
	セイヨウタンポポ	
	オオオナモミ	
コリ科	タカサゴコリ	
アヤメ科	キショウブ	
	ニワゼキショウ	
イネ科	ハナヌカススキ	
	コバンソウ	
	ヒメコバンソウ	
	イヌムギ	
	ウマノチャビキ	
	カモガヤ	
	シナダレスズメガヤ	
	コスズメガヤ	
	オニウシノケグサ	
	ヒロハノウシノケグサ	
	シラゲガヤ	
	ネズミムギ	
	オオクサキビ	
ツルスズメノカタビラ		
ナガハグサ		
	ナギナタガヤ	
カヤツリグサ科	キンガヤツリ	
		67

【鳥類】

目和名	科和名	種和名	北陸		
			阿賀野川	信濃川	庄川
ハト目	ハト科	ドバト			
カモ目	カモ科	アヒル	1		
水系別確認種数			1	2	1

注1) 本リストは、家禽、籠脱けを含む。
 注2) 確認種は、「集団分布地調査」、「移動時確認調査」を含む。
 注3) 1; 日本鳥類目録(6版)未記載種

【両生類・爬虫類・哺乳類】

綱和名	目和名	科和名	種和名	北陸		
				関川	小矢部川	手取川
両生綱	カエル目	アカガエル科	ウシガエル			
爬虫綱	カメ目	イシガメ科	ミシシippアカミミガメ			
哺乳綱	ネズミ目(齧歯目)	ネズミ科	ハツカネズミ			
			ドブネズミ			
	ネコ目(食肉目)	ジャコウネコ科	ハクビシン			
両生類水系別確認種数				1	1	1
爬虫類水系別確認種数				0	1	1
哺乳類水系別確認種数				3	2	1

平成15年度生物調査(河川編)外来種一覧表(3)

【陸上昆虫類】

			北陸		
		
		

目と名	科和名	種和名	荒川	1 st 通川	梯川
バッタ目(直翅目)	コオロギ科	アオマツムシ			
カメムシ目(半翅目)	サシガメ科	ヨコツナサシガメ			
チョウ目(鱗翅目)	ミノガ科	オオミノガ			
	マダラガ科	タケノホソクロバ			
	ツトガ科	シバツトガ			
	メイガ科	カシノシマメイガ*			
	ヒトリガ科	アメリカシロヒトリ			
	ヤガ科	オオタバコガ			
ハエ目(双翅目)	ミスアブ科	アメリカミズアブ			
	ハナアブ科	ハイジマハナアブ			
	ショウジョウバエ科	キイロショウジョウバエ			
コウチュウ目(鞘翅目)	オサムシ科	コルリアトキリゴミムシ			
	コガネムシ科	シロテンハナムグリ			
	カツオブシムシ科	ヒメカツオブシムシ			
		トビカツオブシムシ			
カドムネカツオブシムシ					
コウチュウ目(鞘翅目)	ケシキスイ科	クリイロデオキスイ*			
	ホソヒラタムシ科	フタトゲホソヒラタムシ			
	カミキリモドキ科	ツマグロカミキリモドキ			
	ゴミムシダマシ科	ガイマイゴミムシダマシ*			
	カミキリムシ科	キボシカミキリ			
	ハムシ科	エンドウソウムシ			
		アズキマメソウムシ*			
		ブタクサハムシ			
	ゾウムシ科	オオタコゾウムシ			
		イネミズゾウムシ			
ハチ目(膜翅目)	アナバチ科	アメリカジガバチ			
		キゴシジガバチ			
	ミツバチ科	セイヨウミツバチ			
水系別確認種数			18	10	14

注) 種名まで特定されていないものについては、種数には含んでいない。

発見(侵入)年は、「日本の帰化生物(平成5年, 保育社)」を参照した。

*) 貯穀害虫: 貯蔵食物を加害する昆虫類の総称。

【全項目】

種数の計数は「平成9年度版 河川水辺の国勢調査マニュアル[河川版](生物調査編)」に準拠して行った。

平成15年度 河川水辺の国勢調査結果【ダム湖版】

はじめに

国土交通省では、平成2年より全国の直轄・水資源機構管理ダムにおいて、ダム事業、ダム管理を適切に推進するため、ダム湖およびダム湖周辺の環境に関する基礎情報の収集整備をする目的で「河川水辺の国勢調査[ダム湖版]」を実施しています。

河川水辺の国勢調査[ダム湖版]は、魚介類調査、底生動物調査、動植物プランクトン調査、植物調査、鳥類調査、両生類・爬虫類・哺乳類調査、陸上昆虫類等調査という7つの「生物調査」と、ダム湖の利用者数等の調査をおこなう「ダム湖利用実態調査」から成っています。

このうち「生物調査」については、各ダム(遊水地・調節池を含む)について、5年間で1サイクルとして、この期間内に魚介類調査、底生動物調査、動植物プランクトン調査、植物調査、鳥類調査、両生類・爬虫類・哺乳類調査、陸上昆虫類等調査の7調査項目全てが実施されるように計画されています。

したがって、平成2年度から平成7年度の調査で一巡目調査が、平成8年度から平成12年度の調査で二巡目調査が終了し、平成13年度から三巡目調査を実施しています。

なお、宇奈月ダムについては、平成13年度より一巡目調査を実施しております。

調査結果

今回は、平成15年度北陸地方整備局管内の直轄管理ダム6ダム(荒川水系大石ダム、信濃川水系大町ダム、三国川ダム、阿賀野川水系大川ダム、黒部川水系宇奈月ダム、手取川水系手取川ダム)での調査結果について報告を致します。なお、手取川ダムの調査結果については速報値であり、今後数値等が変わる場合があります。

大石ダム(調査項目:植物調査)

植物調査で、108科477種の植物が確認されました。前回調査(平成10年度)では、108科499種が確認されています。

大石ダムにおいて、前回調査でも確認された特定種^{注1)}のヒメサユリ、ヒメヤマカラマツを確認!

植物調査で、特定種のヒメサユリ(絶滅危惧 B類)、ヒメヤマカラマツ(絶滅危惧 類)の2種が確認されました。外来種^{注2)}は24種確認されました。前回調査(平成10年度)では、33種が確認されています。

大町ダム(調査項目:鳥類調査)

鳥類調査で、10目26科53種の鳥類が確認されました。前回調査(平成8~10年度)では、10目26科55種が確認されています。

大町ダム周辺において、前回調査でも確認された特定種^{注1)}のオオタカを確認!

鳥類調査で、特定種のオオタカ(絶滅危惧 類)、サンショウクイ(絶滅危惧 類)の2種が確認されました。外来種^{注2)}は確認されませんでした。

大川ダム(調査項目:動植物プランクトン調査、鳥類調査)

動植物プランクトン調査で、4門5綱19科238種の植物プランクトン及び4門6綱7目12科22種の動物プランクトンが確認されました。前回調査(平成7年度)では、6綱28科236種の植物プランクトン及び5綱17科26種の動物プランクトンが確認されています。(当時報告書では綱科で

の整理しかされておらず)

鳥類調査では、14目32科80種の鳥類が確認されました。前回調査(平成12年度)では、14目31科84種が確認されています。

大川ダム周辺において、特定種^{注1)}のイヌワシ、サンショウクイを新たに確認!

鳥類調査では、特定種のイヌワシ(絶滅危惧 B類)、クマタカ(絶滅危惧 B類)、オオタカ(絶滅危惧 類)、サンショウクイ(絶滅危惧 類)、ハイタカ(準絶滅危惧)の5種が確認されました。外来種^{注2)}は3種確認されました。

三国川ダム(調査項目:動植物プランクトン調査)

動植物プランクトン調査で、6綱17科58種の植物プランクトン及び13綱24科38種の動物プランクトンが確認されました。前回調査(平成9年度)では、7綱18科50種の植物プランクトン及び7綱21科33種の動物プランクトンが確認されています。

宇奈月ダム(調査項目:魚介類調査、底生動物調査、動植物プランクトン調査)

魚介類調査で、5目6科7種の魚介類が確認されました。特定種^{注1)}及び外来種^{注2)}については確認されておりません。

底生動物調査では、14目57科116種の底生動物が確認されました。特定種^{注1)}についてはコシダカヒメモノアラガイ1種を確認し、外来種^{注2)}については確認されておりません。

動植物プランクトン調査では、6門7綱11目23科114種の植物プランクトン及び6門9綱12目22科27種の動物プランクトンが確認されました。

手取川ダム(調査項目:鳥類調査、陸上昆虫類)

鳥類調査で、14目36科90種の鳥類が確認されました。前回調査(平成10年度)では、14目32科73種が確認されています。外来種^{注2)}、特定種^{注1)}は確認されておりません。

陸上昆虫類調査では、20目228科1367種の鳥類が確認されました。前回調査(平成10年度)では、17目195科1305種が確認されています。外来種^{注2)}、特定種^{注1)}は確認されておりません。

注1) 特定種について

次のものに該当するものを特定種としています。

- ・「文化財保護法」の特別天然記念物および天然記念物
- ・「絶滅のおそれのある野生動植物の種の保存に関する法律」の国内希少野生動植物および緊急指定種
- ・環境庁編(1999-2000)「レッドリスト(レッドデータブックの基礎となる日本の絶滅のおそれのある野生生物の種のリスト)」掲載種
- ・環境庁(省)編(2000-2003)「改訂・日本の絶滅のおそれのある野生生物 - レッドデータブック - 」掲載種

注2) 外来種について

本資料における外来種とは、おおそ明治以降に人為的影響により侵入したと考えられる国外由来の動植物全てを指し、侵入以後に国内に定着した種であるか否かの判断は、困難な種があるため選定の際に考慮していません。また、外来種の選定には、-21~22 ページに掲載した文献および -23~24 ページに掲載した学識者による意見を参考に行っています。

近年、外来種は生物多様性を保全する上で最も大きな脅威の一つとして認識されており、人間が意図的・非意図的に持ち込んだ外来種が、侵入先の在来種を捕食、競争、病害などによって減少させたり、在来種と交雑したりすることにより、在来種の絶滅の可能性を高めるなどの問題を引き起こすことが、これまで多くの事例から明らかにされています。